南アフリカ共和国って…

アフリカ大陸の最南端

日本の約 3.3 倍の広さ。全地域の約 4 割が標高 1800mの高原。ヨハネスブルグも約 1700mの標高である。

太陽の国・晴れの国・虹の国

1 年を通じて晴天の日が多い。年間平均日照時間も世界でもっとも長い国に属している。ヨハネスブルグの最高気温は 1 月の 28.6 度，最低気温は 7 月の 4.5 度である。

「虹の国」(Rainbow Nation)とはマンデラ元大統領の就任演説の言葉から。「多民族がまとまりひとつの国を作っていく」という意味。雨上がりの強烈な太陽光線によってできる虹は見るものを圧倒する。

人口構成

全人口は約 4000 万人。黒人は約 75%, 次いで白人約 11%, カラード約 9%, アジア系約 3%

コサ・ズールー・ソト・ベンダなど大きく分けても約 9 の部族に分かれている。各部族への帰属意識はかなり強い。

豊富な天然資源

特に金・ダイヤモンド・クロム・ウランなどは世界有数の産出量。でもその多くはヨーロッパ・アメリカ・日本の資本。近年は中国の影響力が大きくなってきた。

スポーツ

天候と広い国土に恵まれ，スポーツは極めて盛んである。テニス・ゴルフ・ラグビー・サッカー・クリケット・スカッシュなどがある。野球も人気がある。

アパルトヘイト

人種隔離政策は，1994 年マンデラ大統領の政権によって終止符が打たれた。しかし，その弊害は尾を引いており，特に貧富の差，教育，社会保障制度が立ち遅れている。

治安

アパルトヘイト終結後，政治的動機を持ったテロ・暴力事件は大幅に減少した。しかし，貧富の差による不満は日に高まっており，凶悪犯罪は増加の一途をたどっている。

HIV/AIDS

HIV/AIDS は爆発的な広がりを見せており，国民の約 20%が感染していると言うデータもある。労働力の減少とともに，母子感染による未来の担い手までも非常に少なくなるおそれがある。貧富の差・そして教育の差がもたらした悲劇である。

ヨハネスブルグ日本人学校（http://www.jsj.org.za/index2.htm）

学校内容

昭和 41 年 8 月補習校として，昭和 42 年 4 月全日制日本人学校として開校。運営主体は南ア日本人会。

児童生徒数は，小学部３４人・中学部９人計４３人（平成 17 年 4 月現在)。一時は 150 名に達した，といわれる児童生徒数は減少の一途。ここ数年は 40 人前後である。企業の駐在事務所の規模縮小，駐在員家族の若年化・単身赴任が多くなっているのが一つの原因と思われる。また，アメリカン・インターナショナルスクール，現地校と駐在員の学校選択の幅も広い。治安悪化のため広域化する通学区により，片道１時間半もスクールバスに揺られる児童もいる。

小学校１年から英会話活動を行っている。毎日 20 分と週１時間の英会話の時間を確保し，2 人の英会話講師と学級・教科担任が授業を行う。その他は基本的に日本の学習と同じ。少人数・家族的な雰囲気のなか，教育が行われている。

昼食･休憩時間は小学１年～中学３年までいっしょになって楽しむ。緑豊かな校庭で弁当を広げたり，芝生に寝ころがったりして，ゆったりと遊ぶことができる。

通学はスクールバスが多い。セキュリティシステムの高額化とバス購入費積み立て，人件費などの高騰により，自家用車での送迎も増えた。基本的には徒歩・公共交通機関は安全確保のため利用しない。

現地理解活動として，近隣の公立校と交流を行っている。(年４回：2 校交流していたが，1 校に絞られた。）また，近隣の老人ホームの慰問活動（年１回）を続けている。

宿泊研修は高学年が年に１回，中学部は年に 2 回行われる。特に夏季（1 月）小学部高学年・中学部児童生徒による「野外学習」は南アフリカの自然を体験する良い機会となっている。

安全を守るために。

学校は非常に厳重な防備を行っている。開校当初フェンスすらなかった所には２m50ｃｍにおよぶレンガ塀, その上に高さ 70ｃｍの高圧電線が 7 本張り巡らされている。さらに上に有刺鉄線。

門はセキュリティガードが常駐し，武装している。日本人会が発行するＩＤをもたなければ入れない状態となっている。

校舎にも他の住宅と同様，鉄格子によって区画できるようになっている。管理棟，コンピュータ室，講堂（音楽室)，体育館は各個で侵入者を妨げ，銃弾を防ぐことができるように鉄格子の配置を工夫している。

またもし孤立しても約 60ｋｍ離れた首都プレトリアにある日本大使館とも連絡がとれるように無線回線も確保されている。

地震・台風など気象災害には縁がない土地だけに，児童生徒の避難訓練も火災・暴動･侵入者そしてバスジャックに対応するものとなる。バスが路上で故障した場合，非常に危険な状態になる。レッカー会社･警備会社･職員が急行, 児童生徒の安全を確保した上, 代行バスの手配などがすぐさま行われる。実際に 14 年度には４回，16 年度には２回あった。

また､現地職員は警察･警備会社とも密接に連絡を取り合い, 安全のための情報収集を行なっている。

このような体勢がとられており万全のように見えるが，人的なミスはある。14 年度には侵入事件が 2 度あり，そのたびに体勢は強化され，今に至っている。子ども達を守るため、日々教員・保護者・日本人会は活動を続けている。